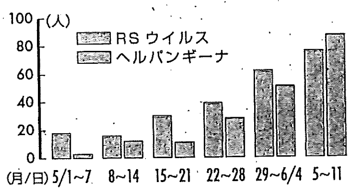
2023年（令和5年）6月23日（金曜日）　下野新聞

RSウイルス、ヘルパンギーナ…

子どもの感染症増加

県内、「コロナ」緩和影響か

RSウイルスとヘルパンギーナの感染報告数



県内で子どもの感染症の患者報告数が増加している。県感染症情報センターによると、県内の6月5～11日（第23週）の患者報告数は、発熱やせきなどの症状が出るRSウイルス感染症が前週比14人増の76人。夏風邪の一種で子どもに流行するヘルパンギーナは36人増の87人で、いずれも増加傾向という。県内の小児科医は新型コロナウイルスの感染対策の緩和に伴い、感染が増えているとみる。県は感染が広がる可能性もあるとして対策を呼びかけている。

RSウイルスは発熱や鼻汁などの症状が出る。重症化するとせきがひどくなり、肺炎になる場合もある。

同センターによると、小児科がある県内48カ所の医療機関で定点観測している患者数は、5月中旬から右肩上がりが続く。同月29日～6月4日（第22週）の1医療機関当たりの患者数は1・29人で、第23週は1・58人に増加。2004年以降、同時期に1を超えたのは21年と今年だけだった。

ヘルパンギーナは主に乳幼児が感染し、高熱や喉に水疱が現れる。患者数は5月上旬から増え始めた。第22週は1医療機関当たり1・06人だったが、第23週は1・81人に増えた。

真岡市高勢町3丁目、西真岡こどもクリニックでは5月以降、RSウイルスやヘルパンギーナ、咽頭結膜熱（プール熱）の原因にもなるアデノウイルスなどにかかった患者が増えている。同月の患者数は11年の開業以降で最多となり、今月も例年より多いという。

仲島大輔理事長（52）は「コロナ禍は三密を避ける生活で、感染症の流行が抑えられていた。現在は普通の生活に戻り、多種多様な感染症が同時流行している」と警鐘を鳴らす。

獨協医大小児科の吉原重美主任教授はコロナの感染対策の緩和などで「小児特有の感染症が通常の感染状況に戻った」とみる。「冬に多いRSウイルス感染が季節に関係なく夏にも流行するようになった」と指摘。

「症状があれば病院を受診してほしい。人が多い場所でのマスク着用、手指消毒や手洗いなどの感染対策が必要」と話している。（野中美穂）